

# 中島潤さん

●認定NPO法人ReBit  
事務局長兼キャリア事業部シニアマネージャー

## あらゆる人が、それぞれのちがいを お互いに尊重できる社会を目指して

近年、LGBTという言葉は広く認知されるようになった。日本では13人に1人がLGBTという調査(2015年電通ダイバーシティ・ラボ調べ)もあるが、実際にどのような社会課題があるか理解が進んでいるとは言えない状況だ。LGBTに関する適切な理解を広め、互いの「ちがいを尊重し合う社会風土を醸成するため、多くの子どもたち、そして子どもに関わる大人や社会に向けて発信している認定NPO法人ReBitの中島潤さんにお話を伺った。

●取材・文……太田美由紀(ライター)

### 自分が困った経験を なくすために

「LGBTを含めた全ての子どもが、ありのままの自分で大人になれる社会」を目指し活動する認定NPO法人ReBit。大学生や20代の若者を中心に、LGBTの人にもそうでない人も参加している団体で、その活動実績は今年で11年を迎える。

中島潤さんは団体の設立当初から学生メンバーとして活動に関わっていたが、2年

前に正式加入し、キャリア事業部マネージャーを経て事務局長として専念するようになった。

「この社会課題が解決されるまでは自分の時間をこの活動に投じたいと考えていましたし、実際に仕事をしたり大学院に進学したりしながら並行して活動していました。いま、LGBT関連は追い風が吹いています。これを一過性のブームに終わらせないようにチームとして力を発揮したい」

この団体の活動の核となっているのは、

### 原因が分からないまま 自分を隠していた

中島さんは「トランスジェンダーであり、女性でも男性でもない」と自認していることを周囲にも明かしている。違和感を持ち始めたのは、小学校に入ったころだった。「まずランドセルですね。わが家は好きな色を選ばせてくれたので、黄色を選びました。多くの女の子は赤、男の子は黒や紺が多かった。学校では、上履き、習字道具、絵の具入れ、体操服などが色で分けられて

いました。それまで好きなものを自分で選ぶ環境だったのに、そうではなくなりました。周りも少し違うことをすると、からかいのタネにもなりました。少しずつ周りから浮くようになって、女の子グループにも男の子グループにも仲のいい友達がいないう状況になり、学校に行かなくなりました」

中学からは私立の中高一貫校に進学し、「周りから浮かないようにすれば友達もできるだろう」と自分で考え、努力した。

「普通の女子高生ならこの芸能人が好きって言うだろう、髪型はこんな感じ?と、自

「自分たちが困った経験を、どうすればなくすることができるのか」。学校で困った経験が教育事業に、就職活動や職場で困ったことがキャリア事業につながっている。

「LGBTの存在も課題も見えにくいので、できることを一つずつ積み重ねるしかない。まず存在を認知してもらい、多様な性を前提とした仕組みや制度が整わないと、課題の認知と解決にたどり着けません。一歩ずつつなげていくことが使命だと思っています」

分が想定する『正しい女子高生』を目指しました。でも、自分の生活という実感がなく、かといってセクシュアリティに関する知識もないので周囲との違和感が何に起因するか分かりません。原因が分からないまま自分を隠して生活していた。学校や予備校では気が休まりませんでした」

中島さんがインターネットでトランスジェンダーという単語を見つけたのは、高校2年生のころだ。「生まれたときの性別と違う性別で生きる人、これかもしれない」と初めて思った。それ以降、「トランスジェンダー」という言葉で検索し、手探りで情報を集め始めた。偏った情報をうのみにしてしまっただけもある。

トランスジェンダーは、女性から男性、

## Profile

●なかじま・じゅん●

福岡県生まれ。東京外国語大学在学中、社会学ゼミにて国内外のマイノリティを取り巻く課題について学ぶ。大学卒業後、民間企業に就職。その後、より深く「多様な性」をめぐる課題を研究すべく、大学院にて社会学を専攻、修士(社会学)。2019年より認定NPO法人ReBitへ職員として加入。「LGBTも含めた誰もが、自分らしく働き、生きることを実現する」という目標のもと、企業・行政への研修やコンサルテーション、就活生・求職者への支援を行う。



男性から女性に移行するどちらかなのだという間違った情報から、「男性を指さなければ」と思い込んでいた。さらに、トランスジェンダーはみんな東京に集まっていると信じ、東京の大学を目指すため、高校2年生のときに母にカミングアウトした。「実は、いままで一度も自分を女だと思っただことはないっちゃんね。自分はトランスジェンダーとして生きていきたいけん、東京の大学に行かせてほしい」と話すと、母は絶句し号泣した。

「ごめんね。ちゃんと産んであげられなくて」

その言葉はいまでも忘れられない。

「母はそれから3か月ほどの記憶がないと言っていました。母の涙や言葉は、高校生の私にとっても大きなショックでした。私たちはお互いに正しい情報を知る方法がなかった。正しい情報を伝えることが本当に大事だと思います。もう誰にも、あの衝撃を味わってほしくないんです」

その後、中島さん親子は本などで正しい情報や知識を手にし、親同士のグループにも参加するなどしながら、お互いに理解し合える関係に至ることができた。しかし、いまもなお、情報の不足や誤解により、親

多かった。

「女性じゃないなら男？ 戸籍は？ ちゃんと男になってからもう一回来て」

そんな言葉を投げかけられたこともある。エントリーした60社ほどのうち、セクシュアリティを理由に断られたところが20社。結果的には高齢者福祉のベンチャー企業に就職することができた。

会社の理念は「介護が必要になってからもその人らしく生きるために必要なサービスを届けよう」。その理念に深く共感した。会社は、内定の時点から丁寧に中島さんの希望を確認してくれた。

「トランスジェンダーであることを明かして入社する従業員はあなたが初めてです。分からないことも多いが話し合っていきましょう」「誰にどこまで伝えますか。タイミングはいいですか」

制度や設備が整っていない会社でも、「個人を尊重し対話する」という文化があれば、お互いに話し合いながら環境を整えることができるかと肌で感じた。

### 違いを尊重することを自分ごととして

会社員として5年ほど働いた後、あらた

子の関係を断ってしまう人も少なくない。

### お互いの「ふつう」が異なるのは当たり前

東京外国語大学に進学すると、さまざまな国から人が集い、多様な言語を話し、多様な文化を持つ人が共に過ごす日常があった。自分が考える「ふつう」と相手が考える「ふつう」が異なるのは当たり前。カミングアウトできる環境になり、学校生活を楽しむことができるようになったと言う。

「実は、リボンやお花やビーズなど、女の子らしいと一般的に思われるものも好きだったんですが、大学に入った当初は頑張つて男っぽくならうとして、そういうものを好きな気持ちは消そうとしていました。高校生まで女の子をやっていたことも、トランスジェンダーとして男の子をやることもつらかった。大学に入ってしばらくしてようやく、自分のままでいいんだって思えるようになったんです」

性別やセクシュアリティだけでなく、国籍や文化、言語を超えて多様な人たちとつながることが、自分らしさを手に入れることにつながった。

就職活動の時期に差し掛かると、また大

めて大学院に進学し、Xジェンダーの社会課題について研究に取り組んだ。その後、より多くの人たちに自身の経験や研究から得たものを伝えたいと、認定NPO法人 ReBit を就職先に選びいまに至る。

LGBTの課題は、その本人や家族など身近に問題がなければ関係がないと捉えられがちだが、と前置きをして、中島さんは最後にこう話してくれた。

「セクシュアリティにかかわらず、他の要素も含めて私たちはみんなそれぞれに違います。そのちがいによって生きづらく感じたり、そのちがいを尊重されていないと感じたりすることは、誰にとつてもつらいことです。目に見えているちがいも見えてないちがいも同じように、お互いのちがいをどんなふうにも尊重できるだろうかということ、それぞれが自分ごととして考えられたら素敵だなと思います。あらゆる人の全てのちがいをお互いに尊重することを、たまたまいまはLGBTという課題を切り口に考えて活動をしているんです」

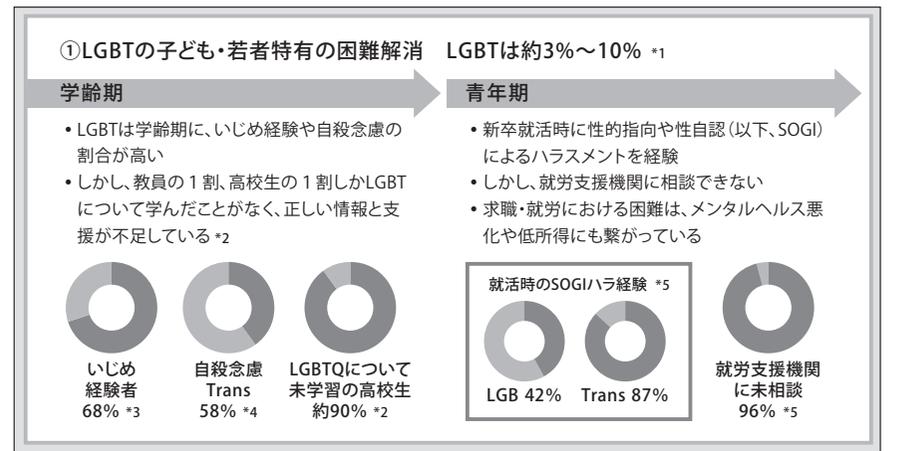
現在、中島さんは、企業や行政での研修やコンサルティングの提供をしつつ、キャリア支援者の育成にも携わっているが、今年度はさらに活動領域を広げ、LGBTな



ReBitのホームページ「ALLY TEACHER'S SCHOOL」では、子どもに関わる大人のために多様な性に関する知識や情報が閲覧でき、「やりたいこと」「欲しい資料」「対象」など目的別に資料や記事を探ることができる。保護者の相談に乗る際にも役立つ情報が多い

どのマイノリティ性があり、かつ精神・発達障がいがある「複合マイノリティ」を主対象とした就労移行支援事業所「ダイバーシティキャリア新宿センター」を立ち上げる計画だ。

「社会福祉士、精神保健福祉士、看護師、そしてもちろん保健師の皆さんなど、さまざまな専門職の方たちにも、セクシュアリティについて困難を抱えている人たちをどうすれば支援できるか、一緒に考えていただきたいと思っています」



※ ReBit提供資料